世界名作劇場

小公女(プリンセス)セーラ

『ミンチン院長の後悔』

第 45 話

提 供 ハウス食品工業

制 作 日本アニメーション
フ ジ テ レ ビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第四十五話「ミンチン院長の後悔」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ロッティ
アーメンガード
ラビニア
ジェシー
ガートルード
モリー

ジェームス

クリスフォード

カーマイケル

ラムダス

（ドナルド）

（ジャネット）

（夫人）

エミリー（人形）

シーザー（猫）

メルの一家（ネズミ）

1 ミンチン学院・全景

小雪が降り続いている――

鋭くかぶるミンチンの声――

ミンチンの声「さ、云うんです！……一体セーラは、何処へ出て行ったんです！」

2 同・台所前の廊下

ミンチンとアメリアの前に、泣顔で首を振るベッキー――傍にモリーとジェームス。

ベッキー「知、知りませんです！……ほんとに私、お嬢さまが何処へ行ったのか……」

ミンチン「嘘をおつき！……モリーもジェームスは知らないと云ってます」

モリーとジェームス、あいまいにミンチンに頷いて顔を見合せる。

ミンチン「その上お前まで知らないなんてハズがありますか！」

ベッキー「ほ、ほんとでございますです！」

ミンチン「お前は、そうやってセーラのかばい立てを！」

怒りにまかせ、いきなり殴ろうと右手を振り上げる――

――

ベッキー「（首をすくめ）お、お許し下さいまし！」

アメリア「お、お姉様……（一方を振返る）」

振返ったミンチン、ぎょっと息を抜かれ、振り上げた手をおろす。

立っているラビニア――少しはなれたその背後に、ジェシー、ガートルード、アーメンガード、ロッティ以下の女生徒たちが、息をつめて様子を見守っている。

ミンチン「な、なんの用です」

ラビニア、チラリとベッキーを見たが、一歩入ると、
切出す——
ラビニア「あの……院長先生にお伝えしたい事が……」
ミンチン「早く仰言い！」
ラビニア「私……セーラの行先なら、存じていますけど」
ミンチン「なんですって？」
アメリア「あなたが……」
ベッキーも、愕然となる——
ラビニア、背後の女生徒たちを振返り、これみよがし
に微かに頷いてみせると、ミンチンの方に向き直り、
ゆっくりと続ける。
ラビニア「私……目撃したんですの……」

3
フラッシュ

ラビニアの声「セーラが、お隣りの玄関に、そっと入って行く所を
……」
二階の出窓から、じっと見降しているラビニア――
×　×　×
その眼下に――野菜篭を抱えたセーラが雪の中を隣
家の玄関に向う姿が見える。

4

同・台所前の廊下

茫然と顔を見合せるミンチンとアメリア。
ミンチン「アメリア！……生徒たちを！」
云いすてざま、ラビニア以下を押し分けるように、一
階への階段へ――
アメリア「お、お姉様！」
冷笑して見送るラビニアと、ガートルード、ジェシー。

心配気に立尽すアーメンガード、ロッティ――そしてベッキー。

5 同・廊 下

眠っているシーザー――勢い込んで上って来たミンチンがシーザーをけ飛ばしざま院長室へ――すっとんで、激しく怒るシーザー――

6 同・院長室

入って来たミンチン、窓辺へ行き、隣家の方を見る。

7 クリスフォード家・表

降り続く雪の中に――　馬車が停っている。

8

ミンチン学院・院長室

窓から窺っていたミンチン、動揺を押え、振返る――

ミンチン、両拳をもみ、焦々と行きつ戻りつしはじめる――入って来るアメリア。

アメリア「お、お姉様……」

ミンチン「(呻く) な、なんと云うことを……」

アメリア「お隣りの家へ行ったのが、ほんとうだとすると……セーラさんは、一体どう云うつもりで……」

ガッと立停り、アメリアを見るミンチン。

ミンチン「判らないのね？　馬鹿なあんたには？」

アメリア「す、すみません……」

ミンチン「図々しくお隣りに押しかけて、ある事ないこと並べたて

て、同情を買おうと云うコンタンよ。あのセーラのやりそうなことです！」

アメリア「そ、そんな、セーラさんがまさか……」

ミンチン「あなたは黙って！」

ミンチン、帽子掛に行き、帽子をとると乱暴に合せる――

ミンチン「こんな勝手放題を許しとく訳には行きません！　私が行って引きずり戻して来ます！」

アメリア「お、お姉様……！」

9　同・廊下

覗っていたラビニア、ジェシー、ガートルード、ロッティ、アーメンガード以下の女生徒たちが、ぱっとドア前から飛びのく――

同時に、荒々しく開いたドアから、帽子にコートのミンチンと、アメリアが出て来る――

ミンチン「なにをしてるんです！……みんな、部屋へ戻るんです！」

女生徒たち、一斉に階段へ逃げ上る。

ミンチン、その儘玄関口へ――

アメリア「お姉様……！」

慌てて追うアメリア――

一方で、脅えて見送っているベッキー。

10 同・表

出て来るミンチン、玄関口で立尽して見送るアメリアを残して、雪の表通りへ……。

× × ×

そして、クリスフォード家の玄関前へ乗り込んで行く

——

11 クリスフォード家・玄関前

踏石を一気に昇って来たミンチン、荒々しく呼鈴を鳴らす——

12 同・玄関ホール

同・玄関ホール鳴る呼鈴の音。

奥の廊下から、ラムダスが出て来ると、玄関ドアを開ける。

立っているミンチン、異邦人の出迎えにギョッとなる。

ラムダスも、意外な来訪者に、怪訝な表情になる——

ミンチン「あ、あの、私は……」

ラムダス「存じて居ります」
ミンチン「まあ……（ジロリと見て落付きを取戻す）言葉が判るなら、御主人に取つぐように」
ラムダス「少々お待ちを……」

13 同・居間

ドアが開き、ラムダスが入る――
セーラとクリスフォードを取囲んでいたカーマイケル、夫人、ジャネット、ドナルドたちが一斉に振返る――
ラムダス「御主人様、お隣りのミンチン様がお見えでございますが」
驚くカーマイケル一家の中で――蒼然と立上るセーラ、思わずクリスフォードを見る。クリスフォードもセーラを見て微かに頷いてみせる。
クリスフォード「安心おし……」

クリスフォード、カーマイケル夫人に顔を向ける――
クリスフォード「では、先程申したようにこの子の着替えを」
カーマイケル夫人、心得て頷くと、セーラを促し、次のドアへ―― ジャネット、ドナルドも続く。
そのドアにセーラたちが消えると、クリスフォードは、ラムダスに命ずる。
クリスフォード「お客様をこちらへ」
ラムダス「かしこまりました……」

14 同・玄関ホール

再び戻って来るラムダス――
ラムダス「お待たせ申しました。どうぞ、こちらへ……」
待っていたミンチン、威厳をつくると、ラムダスの案内に続く――

15

同・居間

ラムダスの開けたドアを、勢いよく入って来るミンチン、はっと見て立停る。

暖炉の前に、車椅子に坐った儘のクリスフォードと、その脇に立ったカーマイケルがじっと見迎えている。

ミンチンの背後で、ラムダスが静かにドアを閉めて廊下に去る――

ミンチン、咳払いして威儀を正す――

ミンチン「はじめまして……私、隣りの女子学院を経営致しております、ミンチンと申すものでございます」

坐った儘のクリスフォードが、微かに会釈を返す――

クリスフォード「クリスフォードです……療養中でしてな。かようなものに掛けた儘をお許し願いたい……」

クリスフォード、傍のカーマイケルを示す――

クリスフォード「私の顧問弁護士、カーマイケル君……」

ミンチン、意表をつかれる――

ミンチン「弁護士さんですって……?」

カーマイケル、微笑で会釈を返す。

クリスフォード「左様……実は、今、カーマイケル君を私の代理人として、そちらへあがらせようと思っていた所でしてな」

ミンチン「なんでございますって?」

ミンチン、急に笑い出す――

ミンチン「ご冗談がお上手ですこと……子供一人のことでわざわざ弁護士さんをお立てになるなんて、大ゲサすぎますですわ」

クリスフォード「と、云われると?」

ミンチン「だって、そうでございましょ?……うちの生徒――と云っても、私の思いやりで、無料で置いてやって参った

みなし児でございますけど――その子がのこのこうかがって御迷惑をかけた位のことで、なにも、弁護士さんまで……」

クリスフォードとカーマイケル、怪訝に顔を見合せる。

ミンチン「そりゃ勿論、あの子が、私どもの知らぬうちに、こちらへ押しかけましした失礼は、私が代ってお詫び申すつもりでございますけれどね」

クリスフォード「ふむ……あの子と云われるのは、ひょっとすると……」

ミンチン「勿論セーラですわ……セーラ・クルー……こちらに入り込んだのを目撃した者があるんでございます」

クリスフォード、カーマイケルを見る。

クリスフォード「君……どうやら、こちらの御婦人はおかしな感違いをされているようだ。冗談などではない事を説明してあげてくれ給え」

カーマイケル「では、ご説明致しましょう……まず第一に、あなたが迎えに見えられたセーラ・クルーさんは、もう、そちらへは戻らぬ事になったと云うことです」

ミンチン「な、なんですって！……セーラにとって、住むうちは私どもの所より他ない筈でございますが」

カーマイケル、静かに首を振る――

カーマイケル「いや、あなたがうちと呼んでおられるあの屋根裏には戻りません。これからは、このクリスフォードさんのうちが彼女のうちになるのですからね」

ミンチン「な、なんと云う事を」

カーマイケル「実は、こちらのクリスフォードさんは、セーラさんの亡くなられた父親、ラルフ・クルー氏の親友で、インドで共同経営をして来た世界有数のダイヤモンド鉱山の持主なのですよ」

ミンチン「世、世界有数の……ダイヤモンド鉱山……」

眼を閉じ、静かにヒジ掛けを中指で叩き続けるクリス
　フォード――　カーマイケルの声がかぶる。
カーマイケルの声「そして、クリスフォードさんは、預って来たク
　ルー氏の莫大な財産、つまり、鉱山の権利半分
　を、セーラさんに渡そうと、これまで行方不明
　の彼女を必死に探して来たのです……いや、そ
　ればかりか、後継ぎのないクリスフォードさん
　は、セーラさんを自分の後継ぎとし、残りの全
　財産を彼女に譲る事を、先程、この私の手で、
　法律的に決定したのですよ」
ミンチン「で、では……セーラは……世界有数のダイヤモンド鉱山
　の持主に……」
カーマイケル「その通りです……彼女は今や、本当のダイヤモンド
　・プリンセスになったのです」
ミンチン「わ、私どもは……お父様を亡くされたセーラさんを、精

一杯お世話して参りましたわ……セーラさんも、その恩は、心得ているはず……」

カーマイケル「でしょうかな」

クリスフォード、眼を開く

クリスフォード「では、御自分でお確めになられるがよかろう……」

カーマイケルが、傍の呼鈴の紐を引く。ステッキを手にゆっくりと立上るクリスフォード。

16 同・玄関ホール

居間から出て来るカーマイケルと、ステッキのクリスフォード、ミンチン。

ミンチン、はっと見る――

二階への階段から――カーマイケル夫人が附添い、ドナルドとジャネットを従えた盛装のセーラがゆっく

りと降りて来る。

——続いて、ラムダスと二人のインド人使用人。

そして、そのセーラの純白のドレスには、無数のダイヤモンドが光り輝いていたのである。

ミンチン、愕然と息を呑み、呻く——

ミンチン「セ、セーラ……」

セーラ、静かにミンチンの二、三段上に立停り、微笑を浮べる——

セーラ「はい……院長先生……」

ミンチン、そのセーラの優しい気高さに完全に圧倒され、ガクッと膝まづく——

ミンチン「ダ、ダイヤモンド……プリンセス……」

顔を見合せたクリスフォードとカーマイケル、完勝の微笑を交す——

（中　C　M）

17 ミンチン女学院・表全景

ミンチン女学院・表全景降り続く雪。

郵便配達夫が来ると、踏石を昇り、ノッカーを叩く――

18 同・玄関内部

ベッキーが、奥から出て来ると、ドアを開ける――

ベッキー「あ……雪ン中、御苦労様……」

19 同・一階廊下

手紙を手に来るベッキー――

アメリアと、ラビニア以下の女生徒たちが出て来る

ベッキー「あの、お手紙でございます」

アメリア「まあ、誰にかしら？」
ベッキー「ええと……（読む）あ、セーラさんにです！」
アメリア「えッ　セーラさんに？」
一斉にざわめく女生徒たち——
ベッキー、アメリアに破れた封筒を渡す。
アメリア「（受取って）あらあらこんなに破れて……（読む）まあインドの、ボンベイ警察からだわ」
ガートルード「キモチワルイ！」
ジェシー「どうせロクな事じゃないわね」
ロッティ「ち、違うもん、セーラ・ママ、いけない事なんかしてないもん！」
ラビニア「ね、アメリア先生……読んでみたら？」
アメリア「だ、だめよ……ひとの手紙を勝手に読むなんて、いけないことよ」
ラビニア「でも、セーラは、お隣りに行ったままだし……もし、ケ

イサツから大事な用事だったとしたら」
アメリア「そ、そうね……困ったわねえ……それじゃ……悪いけど私が、読まして頂く事に……」
遂にアメリア、好奇心に負けて封筒を切ると、手紙を取り出し、読みはじめる――生唾をのんで見守る女生徒たち。
アメリア「まあ……これは、セーラさんが、インドの警察に送った問い合せのお手紙の返事だわ」
ジェシー「ええッ」
一斉にざわめく女生徒たち――
アメリア「聞いて！……セーラさんは、亡くなったお父様の事を調べようとしていたらしいわ……（読む）以上、ラルフ・クルー氏が、奥地のダイヤモンド鉱山で、熱病のため急死した事は事実である。が、争われていた同氏への債権は、共同経営者トム・クリスフォード氏の穴埋めに依り、

裁判所は破産宣告を取消し、同時に有望な鉱脈を発見した同鉱山は目下素晴らしい業績をあげつつある模様。なお、クリスフォード氏は、クルー氏の後継ぎの消息を探すべく、現在イギリス本国に帰国中なり……」

茫然と顔をあげるアメリア――

ベッキー「(叫ぶ)お、お隣りの方でございます!……クリスフォード様と仰言ゃるのはお隣りの御主人でございます!」

驚くラビニア以下の女生徒たち――

20 クリスフォード家・全景

――降り続く雪。

玄関ドアが開き、ミンチンが独りよろめくように出て来る――

ドアが閉り――突然、屋根から滑り落ちた雪魂が、

ドドッとミンチンの頭上に落下するのが見える。
玄関の踏石から、もろに路上に転げ落ちるミンチンの姿――

×　　×　　×

雪の中に、無惨にのめったミンチン、必死に起上る――
人通りはなく、助ける通行人もない。
雪にまみれたミンチン――　あの気取った帽子はどこかへ吹っ飛び、髪は乱れ、眼鏡は不様にずり曲っている。
帽子を失ったのも気づかず、放心したように、露の中を隣りのミンチン学院の方へ、よろめき歩き出す――

21　ミンチン女学院・玄関内

ドアが開き、よろめき込んで来るミンチン――　いき

なりシーザーが、ミンチンの足首にかみつく。

ミンチン「ギャア！」

走り出て来たアメリアが、驚いて駆け寄る——続く

ベッキーと女生徒たち。

アメリア「お、お姉様……」

ミンチン、なにかを訴えようとするが、口をパクパク

させるだけで、言葉にならない。よろよろと雪まみれ

の身体でアメリアにもたれ込む——

アメリア「み、みんな、手を借して！……モリー！……ジェームス

！」

22 同・三階の廊下

階段を——アメリア、モリー、ジェームス、ベッキ

ーに支えられたミンチンが、ふ抜けたような表情でフ

ワフワ上って来る。

×　　　×　　　×

慌てて飛びのくシーザー――

アメリアたちが、ミンチンを自室に運び込む――

×　　　×　　　×

階段を興味深々で、尾いて上って来るラビニア、ジェシー、ガートルード、ロッティ、アーメンガード以下の女生徒たち、立停り、ミンチンの部屋を窺って囁き合う――

×　　　×　　　×

ドアが開き、後退りで出て来るジェームスとモリー、顔を見合せて首をひねったが、下へ降りて行く――

続いて出て来るベッキー、ドアを閉める。

一斉に足音をしのばせて上って来るラビニア以下の女生徒たち、ドア外で内部の様子に聞耳を立てる――

23

同・ミンチンの部屋

ベッドに、がっくりと坐っているミンチンの傍に、威丈高に立つアメリア――

アメリア「な、なんですって！……お隣りの、あの独身の御主人が、セーラさんを探していた億万長者のダイヤモンド鉱山王……」

ミンチン「（弱々しく）そ、そうなのよ、アメリア……信じられないでしょうけど……本当だったのよ……私たちは、せっかく手の中に摑んでいた宝石を、そうとも知らずに二度と手の届かない所へ手離してしまったのよ……」

ミンチン、頭を抱え絶句する。

アメリア「な、なんて云う事を！……」

アメリア、ミンチンがよくやっていたように、拳を叩き歩き廻りはじめる。

アメリア「そうよお姉様のせいよ！……お姉様がバカだったのよ……お姉様がすべてをぶちこわしてしまったのよ！」

ヒステリックに叫ぶアメリアに、ミンチン、茫然と顔をあげる――

ミンチン「ア、アメリア……なにを云い出すのよ……」

アメリア、キッと振返る。

アメリア「なにを云い出すですって？」

アメリア、つかつかと近づく。

アメリア「いいこと？……私は、お姉様のように利巧者じゃないし、お姉さんを怒らせるのが怖いから、今までロクにものも云えないで来たんだわ。でも、もう違うわ、なんだって云うわよ！」

ミンチン「ア、アメリア……」

24 同・廊下

顔を見合せる女生徒たち。

25

同・ミンチンの部屋

アメリア「本当はね、私、よく思ったものよ。お姉様がセーラ・クルーにあんなにつらく当らなければいいのにって……もっと人並みな暮しをさせてあげればいいのにって……だって、あの子は、服も食物もひどすぎたし、働かされすぎてたんですもの！」

ミンチン「ア、アメリア……こ、この私に、よくもそんな事が」

アメリア「お姉様は黙って！」

ミンチン、絶句――

アメリア「そうよ、云いますとも！　どうして云えるのか、自分でも判らない位よ！……さ、云い出したからには、洗いざらい全部云わせて頂くわ！……あの子は、セーラ・クル

ーは、とてもいい子だったわ……だから、もし親切にしてあげれば、ちゃんとそれにむくいてくれたハズなのよ……でも、お姉様は、親切のカケラも示さなかったわ……あの子は、お姉様には賢こすぎたわ、お姉様があの子を嫌ってたのは、そのせいだったのよ！」

ミンチン「ア、アメリア……」

アメリア「お蔭で、私たちは、取返しのつかない宝を逃がしてしまったんだわ……いいえ、あの子の事だけじゃないわ。この噂は生徒たちの口から、きっと親達に伝えられるわ。お姉様のやり口を知った親達は、次々に自分の子供たちをこの学院から引取りはじめるでしょうよ！……挙句、噂は市長夫人にまで伝わって、この学院は、誰も寄りつかないお化け屋敷に……」

ミンチン「や、やめて、アメリア！……た、頼むからやめて頂戴！……私が、私がバカだったのよ！」

ミンチン、ベットに突っ伏すと、声をあげて泣く――
冷然と見守るアメリア――

26 同・廊下

顔を見合せるラビニア、ジェシー、ガートルード以下、
女生徒たち――

27 同・地下の食堂

心配そうにゾロゾロ入って来るラビニア、ジェシー、
ガートルード、ロッティ、アーメンガード以下の女生
徒たち――
ジェシー「ね、ね、ラビニア……この学院、これからどうなるの？」
ラビニア「さア……」

ガートルード「私たち、一体どうなっちゃうのよ！」

ラビニア、大ゲサに両手を拡げ、肩をすくめてみせる

――

ラビニア「多分、アメリアさんの云う通りよ……ここは、だんだん生徒たちが減って……とうとう誰もいなくなる……廊下にはクモの巣が張って、お化けみたいに髪をふり乱したミンチンさんとアメリアさんが、フワフワワフワ……」

女生徒たち、悲鳴――

ジェシー「や、やめてよ！」

ガートルード「教えて！　私たち、一体どうすればいいのよ」

ラビニア「他人の心配なんかしてられないわ……私はとに角、アメリカのお母様の所へ手紙を出すつもり」

ジェシー「それで」

ラビニア「決ってるじゃない……私は、来年から、きっとアメリカの学校へ行ってるわよ……もっと新しくて、きれいな学

校にね」

ジェシー「エエエ？」

ガートルード「ズルイイ！」

ざわめく女生徒たち――

28 同・表（夜）

降り続ける雪――

仄かに照しているガス燈の明り――

その光茫の下に――ミンチンの帽子が、半ば雪に埋まっている。

29 同・台所（夜）

独り洗い物を片附け終るベッキー――吐息すると、

壁の明りを消し、置いてあった手燭を取上げる――

30 同・三階の廊下（夜）

上って来るベッキー――
待っていたシーザーが、鳴きながらすり寄って来る――
ベッキー、身を低くすると、そっとシーザーの頭をなでてやる。

ベッキー「シーザー……お前も、セーラお嬢様がいなくなって、淋しいんだね……」

鳴くシーザー――

ベッキー「判ってるよ……私だって、同じなんだもの……（次第に泣声になる）だけど……お嬢さんは、もう、ここへは帰って来ないんだよ……」

鳴くシーザー――

31 同・屋根裏への階段（夜）

涙を拭いながら、手燭を手に上って来るベッキー。

32 同・屋根裏部屋の前（夜）

上って来るベッキー、そっとドアを開ける――

33 同・屋根裏部屋（夜）

入って来るベッキー、見渡す―― ガランとした部屋のテーブルに、エミリー人形や小馬の置物やオカリナ――写真額。

ベッキー「そうだわ……明日、お嬢様にこれをお届けしてあげなくては……」

ベッキー、そっとそれらを抱え上げる。
壁穴に出て、怪訝に見るメルの一家——

34 同・屋根裏部屋の表（夜）

人形、額などを抱えて出て来るベッキー、自室のドアに行き、開ける——

35 同・ベッキーの部屋（夜）

一瞬、棒立ちになるベッキー——
ベッキー「ラムダスさん……！」
明りの中に、微笑で立っているラムダス。
食事の支度がととのっている——
ラムダス「セーラお嬢様からのお心づかいです」

ベッキー「では、お嬢様は、私の事を……」
ラムダス「無論、お忘れの筈はありません……それ所か、あなたを
　　明日、正式にクリスフォード家にお迎えする事に……」
ベッキー「えッ、お嬢様が、この私を……」
　　ラムダス、微笑で頷くと、手紙を出す。
ラムダス「詳しくは、このお手紙を読まれるようにと……」
ベッキー「まあ……」

36 同・屋根裏部屋（夜）

　　入って来るラムダスとベッキー――
ラムダス「では、明日……」
　　ラムダス、鮮かに天窓に飛びつくと、屋根に消える――
　　見送ったベッキーに微笑がこみ上げる。
ベッキー「お、お嬢様……」

37 同・全景（夜）

降りしきる雪――

（第四十五話　終）